

[翻 訳]

『スペクテイター』(14)

——第126号から第135号——

門 田 俊 夫

第126号 1711年7月25日(水曜日)

【アディソン】

トロイア人もルトゥリア人も、私にとっては変わりはない。

(ウェルギリウス)¹⁾

昨日の紙面で、私は誠実な人は超党派で、共通の敵に立ち向かって戴きたいと提案しました。中立的な立場を取る人たちがひたすら真実と公正の観点に立って行動し、派閥に分裂させる熱意や偏愛を払拭することを狙っていますので、私はこういった人たちが単純明快に自分たちの意思を表明できるように、つぎのようなきまりを用意してみました。

「ここに名を連ねる私たち一同は、つぎのことを厳粛に受け止めることを誓う。一つ、私たちは良心に誓って2足す2は4であることを信じる。二つ、それを否定する人は誰であっても私たちの敵とみなす。同じく私たちは、いついかなる場所でも6は7ではなく、現在10であるものは今から3年後でも変わらず10である、と万難を排して主張する覚悟である。さらに私たちは、この世に生を享けている限り常に、黒は黒、白は白と言い続けると堅く言明する。従って、私たちはあらゆる機会を通じて時を選ばず、黒を白、白を黒

1) ウェルギリウス『アイネーイス』10.108.

という相手に対しては、生命と財産を賭してでも立ち向かって行く。」

もし誠実な人たちが団結して、相手方の熱情と利益のためには、全国民の半数をいけにえにしてもいいと考えている熱狂者とか、公共のためという口実を設けて自身の利益を追求している恥ずべき偽善者の根絶に向かって努力するなら、双方に指導者に盲従するしかない不品行でふしだらな追従者は残るものの、近いうちに当たり構わず嘲笑と侮辱の的にしている荒れ狂った党派への熱意は消え失せることでしょう。

この中立的な立場を取る人たちの協会の会員が、各人の手にしている顕著な持ち場に立って、私利私欲を度外視して、無益で下劣な部分を捨てて美点に席を譲ることにたずさわるならば、それは国にとって大きな恩恵を施すことになるでしょう。

ディオドロス・シキュロスの書物でとても活動的な小動物の話を読んだことがあります。確かその小動物は、ワニの卵を見つけてはそれを割るのを仕事としているエジプトマングースという名の動物だったと思います。²⁾ エジプトマングースは割った卵を食べる訳ではありませんし、卵を割る理由が分かりませんので、この本能はなおのこと驚きです。ひっきりなしに動き回るこの働き者の動物がいなければ、エジプトにはワニが氾濫していることだろう、とこの史家は語ります。なぜなら、エジプト人はこの凶悪な動物を神と崇めており、絶対に殺害しないからです。

党派心の強い人たちの振る舞いを見てみると、大半がどう見てもこの私心のない動物には似ていなく、むしろ、野蛮なダッタン人³⁾の振る舞いに近いのです。彼らは相手が死亡すると、どんな地位であれ、死亡した相手のその能力が当然殺害者のものとなると考えて、優れた資質や才能を備えた人物を殺害したいと熱望しているのです。

2) ディオドロス・シクルス、1.35.7.『シチリアのディオドロス歴史文庫』（ブース訳、1700年）第1巻第3章参照。ディオドロスは紀元前1世紀のシチリア生まれのギリシアの史家。

3) 『ヒューディブラス』1.2.23-26.

私は一連の思索で、すべての党派で同じように猛威を振るっている有害な党派心や偏見を絶滅させようと精一杯の努力して来ましたが、まだまだ不十分です。なぜなら、これは都会よりも地方の方が羽振りをかかせているからです。地方では、これは、礼儀正しい人にしてみれば全く未知の一種の蛮行、陰悪といえる状態にまで至っています。お互いに挨拶を交わすこともありません。党の上層部は互いに外面的には行儀作法を守り、礼節をわきまえて交際しますが、外部に分散されている手先となっている連中は、闘鶏場で顔を合すこともありません。こういった気質が蔓延していますため、四季裁判所での数知れない悪態とか不機嫌な表情とか陰口は言うまでもありませんが、我が国では至る所で定期的なホウィッグ派の乗馬クラブとかトーリー派のキツネ狩りの集いが持たれています。

これまでの紙面で触れたかどうか不確かですが、サー・ロジャー・ド・カヴァリとサー・アンドリュー・フリーポートは、前者が地主側で後者が商工業者側でそれぞれ主義が違います。だが、お互いの気質はとても穏やかですので、二人が顔を合せても愉快なからかいの域を出ることはなく、そのからかいは往々にしてクラブの他の連中の気晴らしとなっているのです。しかしながら、サー・ロジャーは町にいるときよりも田舎にいるときの方がトーリー色を色濃く出します。彼が言うには、そうしないと自分の利益を守ることは出来ないそうです。ロンドンから彼の田舎の屋敷にやって来る道中で、私たちはホウィッグ派の宿では休息すらしませんでした。御者がたまたま立ち寄る場所を間違えると、召使の一人が全速力で主人のところまで駆けてきて、ここの亭主は前回の選挙では誰それに票を入れなかったと耳打ちするのでした。このため判断を誤ってしまい、ベッドは固く食事はまずいということがよくありました。なぜなら、私たちは宿屋の亭主についてはうるさかったのですが、宿そのものについてはあまり気にならなかったからです。要するに、宿屋の亭主の考えが健全でありさえすれば、食事の善し悪しなどは一切意に介しなかった訳です。これは私にとってはやはり勝手の良いことではありませんでした。というのは、一般的に亭主が良ければ、それだけ宿泊や食事が

お粗末だったからです。亭主は客人が自分の味方なら食事がお粗末でベッドが固くても我慢してくれるということを知り尽くしていたのです。こういった事情から、私としては、道中ずっと、サー・ロジャーが亭主は誠実な男だと褒めそやす宿に立ち寄ることには気が進まなかったのです。

サー・ロジャーのカントリーハウスに滞在することになって、私は日々この狭量な党派心を示す事例に接しています。先日、近隣の市場町にあるローンボーリング場（ここは週に一度ある党派の紳士諸士が集う場所ですが）で、風采も立派で振る舞いも上品な闖入者が一人混じっているのに気づきました。非常に驚いたのですが、その人物は公明正大な賭け手だったにもかかわらず、誰も彼に応じなかったのです。尋ねてみますと、彼は前回の選挙で反対側の党に投票したのだということが分かりました。そのために、このボーリング場には彼とお金を賭け合うほど気脈を通じている人がいなかったのです。

この種の実例はいろいろありますが、私自身に関わる例を挙げない訳にはいきません。ウィル・ウィンブルが先日彼の入手した誰も知らないある著名人の出自に関する不思議な話をしていました。そこで、町では噂にもなっていないことを田舎で耳にすることに驚いた私が、彼の顔をじっと見詰めていますと、彼は不意に途中で話を止め、食後サー・ロジャーに私が熱狂的な支持者でないのは本当かと尋ねたのです。

私は地方でこのような軋轢が生まれているのを知って心から心配になりました。これは美德と良識を破壊して野蛮人にしてしまうだけでなく、憎悪を不滅のものとし、亀裂を深め、現在の激情と偏見を後世に伝えることになるからです。私の考えとしましては、現在伺えるこの分裂には、時々、内乱の萌芽が宿っているのではないかと思えるのです。従って、第一原理として、これが私たちの子孫を悲惨で不幸な状態に陥れるのではないかと嘆かざるを得ません。

第127号 1711年7月26日(木曜日)

【アディソン】

物事にはいかに多くの無意味なことが存在していることか。

(ペルシウス)¹⁾

サー・ロジャーの屋敷での習わしとしてつぎのようなことがあります。郵便物が来ると、コーヒーを前にして、老勲爵士が鼻眼鏡をかけてその郵便物から取り出したダイアーの『時事回報』²⁾を声に出して読んで聞かせるのです。彼はダイアーの文章にしばしば伺える風刺的な調子にさかんに笑みを浮かべながら読んで行きます。その後で、今度は私が観察者宛てに届いた郵便物について彼に報告をします。つぎに掲げる手紙はたまたまいつになく彼を満足させましたので、彼の要請を受けてここに披露することにします。

観察者殿

このほぼ1ヶ月間、貴殿は地方の人たちをだしにして都会の人たちを喜ばせて来ました。そろそろ地方の人たちに雪辱の機会を与えてもよい頃合いです。貴殿が都会を後にしてから、ご婦人方が大変放縱になっています。貴殿が田舎に出掛ける前に大きく膨らみはじめていたペティコートは、今ではパンクして小さくぼみができ、日に日にもりあがってきています。³⁾要するに、ご婦人方は観察者殿の目が届かないと分かっていますので、いい気になっているのです。貴殿が頭飾りのことで少々早く誉め過ぎたのです。といいま

1) ペルシウス『諷刺』1.1.

2) ジョン・ダイアー『時事回報』については第43号参照。

3) 『タトラー』紙第113号で、ウィリアム・ジングルが、婦人のペティコートがあまりにも幅が広くて、馬車に乗ることも椅子に腰掛けることも出来ない、特別の乗物を作り出さなくてはならない、と述べている。また、スウィフトは、1711年11月10日、ステラ宛てに、「君はもう鯨骨のペティコートを手に入れましたか。私は大嫌いです。ペティコートの中におとなしい色男を隠すことが出来る。」と書いた。

すのは、しばしば病人の体液がある箇所から別の箇所に伝播するように、過剰な装身具は、完全に追放された訳ではなく、頭から下半身に移動したに過ぎないからです。彼女たちは高さを失ったことを幅で補っているのです。そして、建築様式のあらゆる規則に違反して、上部構造を短く詰める一方で土台を広げているのです。もし彼女たちが、スペインの雌馬のように、⁴⁾風で妊娠が可能ならば、これに勝る発明品は他には思いつかなかったことでしょう。だが、私たちはまだこのペティコートの特別の用途について、つまり、貧弱な体以外に何かを包み込むといったことを聞かされていませんので、ただただ当惑しているのが現状です。

ご婦人方は、この大きなお尻を維持したいために、ペティコートは風通しが良く、時節に合っているのだと言い放ちます。だが、私はこれは単なる口実であって、わざとらしい言い草だと思います。なぜなら、今年の夏はこのところ長年に渡って見られなかったほど穏やかで、どう見ても暑いとは言えないのですから。おまけに、体質の虚弱なご婦人方は、自分たちの母親のときよりもさらに身体を冷やす必要はないのです。

思索をする人々の中に、最近男性が非常に厚かましくなっており、フープペティコート（張り骨で広げたペティコート）は男性を遠ざけるために使用されているのだという意見を述べる人がいます。確かに、女性の貞節を守るには、このように城壁の外堡や野堡で幾重にも固めておくに限ります。従って、鯨骨を着用している女性⁵⁾は無作法な男性がいくら接近して来ても大丈夫なのです。鯨骨を張り巡らせておけば、ちょうどサー・ジョージ・エサリッジの『桶の中の恋』⁶⁾のようなものなのです。

こういったさまざまな憶測をする人たちの中に、迷信深い人たちもいます。

4) スペインの雌馬は風で妊娠するという伝説があった（リーン『雑録』2.102-3.）。これに関しては、1708年6月16日のブリティッシュ・アポロにも愉快的説明が掲載された。

5) ポープ『毛髪略奪』2.119-22.

6) エサリッジ『喜劇的な復讐、またの名を桶の中の恋』（1663）。この作品については、第44号でも言及された。

彼らはフープペティコートを一種の予兆と考えます。中には、これはフランス王の失墜を意味している、また、ファージンゲール（張り輪）がイギリスに登場したのは、スペインの専制権が崩壊する直前のことだったのだと主張する人たちもいます。⁷⁾また中には、これは戦闘と流血の前兆であり、彗星の尾と同じ予知能力があるのだと考えている人たちもいます。

このペティコートを着用している婦人を初めて目にしたとき、声には出しませんでした。私はお産間近なのに散歩していると非難せざるを得ませんでした。だが、そのうちに流行に敏感な女性は全員こんな格好をしているのを知り、自分が誤解していたのだと分かりました。一般には、ある悪賢い女性が、ちょうど用心深い大将が敵の攻撃をかわそうとして、時々味方の兵20名から30名に自分と同じ衣服を着せるように、仲間を共犯者に仕立てて世間の非難をかわそうとして、仲間を引きずり込み鯨骨を着用させているのだと考えられています。張り出しているペティコートによって、特徴はすべてなくなり、母親と娘、未婚者と既婚者、妻と寡婦の差もなくなります。とはいえ、私としましては、これほど多くの姿形の良い清純な乙女が膨れ上り、太鼓腹を抱えているようによたよた歩き回っている様子を見ると心を痛めざるを得ません。

もしこの流行が庶民にまで及ぶと、公道は混み合い、もっと広い通りが必要になることでしょう。すでに一部の上流階級の集まりではかなり是正されて来ていますので、かりにこの流行が拡大するようなことがあっても、庶民の多くは毒されないのではないかと私は期待しています。とはいえ、(女性のこのやり方に憤慨している男性がそうならないとも限りませんが) もし男性が突然筒型のズボンを着用することになれば、一組の夫妻だけで教会の信徒席はふさがってしまいます。

ご承知のように、アレキサンダー大王はインド遠征中に、自分に対する特別な印象を後世に伝え、自分が大男で構成された軍隊を率いていたのだと思わ

7) 1558年のこと。

せるために、兵士全員に着用させた、自分の命令で作らせただぶだぶの鎧兜を何組か土中に埋めたとの記録があります。⁸⁾もし現在使用されているペティコートがたまたま骨董店の店頭にも吊るされるようにでもなって、私たちから何世代か隔たった後の子孫が、魅力的に見てもらおうとして奇怪な姿をした自分たちの曾祖母たちをさほど軽蔑しなかったとしますと、この子孫たちにはアレキサンダー大王の場合と同じ誤解を生むことになるのは確かです。

新しく流行しているこのパンテオンつまりフープペティコートのことをつらつら考えていますと、古代の哲学者のことを思い出さざるを得ません。彼はエジプトの神殿に入って行き、偶像を探したのです。その結果、黒い小さな猿が中央に祭られていたのです。⁹⁾彼はそれを見て、つい、(崇拜者にとってはとても不敬なことですが) こんな立派な神殿にこんな滑稽なものが鎮座ましましているとは、と大きな声を出したのです。

貴殿は以前に紙面で衣服の詳細にまでは言及しないと述べておられましたが、こんな尋常でない場合は、女性の鯨骨をなくし、彼女たちの間に広まっている慢心を是正することは貴殿にとって相応しいお仕事だと私は考えています。貴殿が町に帰られましたら、ペティコートは自然にすたれていくものだと思います。少なくとも貴殿にほんの少々活字にしていただけますと、ペティコートはまるでオジギソウのように縮んでしまうでしょう。そうすれば、この不吉な代物に脅え驚いている人たちは有り難く思う次第です。

敬具

第128号 1711年7月27日(金曜日)

【アディソン】

調和を欠く。(ルカヌス)¹⁾

8) プルタルコス『アレキサンダー大王伝』62.3-4.

9) 「豪華な寺院の猿」は、ティケル写本に登場する。

1) ルカヌス『ファルサリア』1.98.ルカヌス(39-65)はローマの詩人で、『ファ

女性は本来男性より陽気で快活な存在です。それが血筋によるのか、性格によるのか、血気盛んなためなのか、また、誰かが考えているように、心底そうであるのかは、私は決め兼ねています。女性に与えられた天賦の才が快活であるとしみますと、男性のそれは沈着さです。それゆえ、私たちは神の定めたこの独特の気質を守るよう留意しなくてはなりません。極端に走り、理性の道を踏み外すようなことがあってはなりません。確かに、一方の一挙一動がこのうえなく厳格になり、他方が活発で陽気になるといったことがあります。男性はある種残忍な人生観に、女性は軽率な色恋に、囚われないように気を配る必要があります。²⁾これが守られないと、男性はしばしば皮肉屋になってしまい、女性は男たらしになってしまいます。つまり、男性は陰鬱で不機嫌な人物となり、女性は生意気で気まぐれな人物となってしまいます。

以上のことから、男女は両者で一对となっているのだと、つまり、夫の苦悩や不安は、妻の陽気さと上機嫌によって和らげられるのだと言えます。両者の気分がうまく調和を保つと、心配と快活さは同一歩調を取り、一家は、装備が行き届いている船のように、帆も底荷も万全となります。

(私は田舎に滞在中ですので、どうしても自然からの言及をしたくなるのですが) 自然誌家によると、鳥の場合、さえずるのは雄鳥で、繁殖期が始まる少し前に鳴きはじめ、その時期が終わると間もなく鳴き止むとのことです。また、雌鳥が卵を抱えている間は、普通雄鳥は雌鳥にその鳴き声が届く範囲の枝に止まって、抱卵している間は絶えずさえずって雌鳥を慰めているとのことです。

ルサリア』はカエサルとポンペイウスの争いと共和政の末路を描く。

- 2) 1712年8月、メアリー夫人はエドワード・ワートリー・モンタギューへの手紙で「男性は気ふさぎになって深刻に考え過ぎないように、女性は媚びを売って軽挙に走らないように、用心しなくてはならない、とのスペクテイターの指摘は当を射ている。」と書いた。メアリー夫人(1689-1762)は、キングストン伯爵の娘で、1712年モンタギューと結婚。また、彼女はフェミニストとして知られており、夫とコンスタンチノーブル滞在中に、東洋での生活を描いた愉快な「書簡集」を執筆した。

こういった鳥の間の約束事は、ひなが誕生するまで続きます。そこで、鳥類の場合は、そう呼べればの話ですが、婚姻状態の心配と労苦は主として雌にあります。それに対して、私たち人間の場合は、終生人生を共にし、主たる責務は男性に注がれているのですから、神は女性にはなだめ励ますといったわざを授けているのです。つまり、女性は、一家を養い、二人の間に生まれた子供の教育のために終始腐心している伴侶を元気づける役目が与えられている訳なのです。しかしながら、これは、まるで互いに義務には報いがなく、義務は双方に課せられてはいないかのように、厳密に受け止められてはいません。男女それぞれに授けられている性癖や資質を見ると、神のおおよその意図が示されているに過ぎません。

だが男女の気質がそれぞれ異なっている理由は何であれ、女性の振る舞いを観察してみますと、女性は自分たちの生来の気質を和らげ釣合いを取ってくれる人物よりもむしろ、軽やかで浮ついた自分たちの気質と似通った人物を相手にしたがつているのが分かります。昔から分別のある人よりも洒落者の方が勝利を得るという愚痴があります。笑いに包まれた無味乾燥な生活を送っているお喋りで生きのよい輩を見ますと、女性の人気者と断定しても間違いありません。女性はお喋りとか浮ついたことには抵抗し尽くせないのです。要するに、普通の女性が男性に対して抱く情熱はひとえに他者に向けられた自己愛にほかなりません。女性は女性以外のあらゆることにも女性らしさを求める訳です。こういった女性に対しては、ドライデン氏のつぎの詩句ほど優れた諷刺を私は知りません。

思慮を欠いた女性は、外見やくだらないお喋りに

だまされ、男性の中にある女らしさを愛するのだ。³⁾

これが女性に大きな不幸をもたらす原因となります。なぜなら、往々にして女性は自分と同じように素敵だと思い込んだ男性に引き付けられ、たまたま両者が陽気であると、散財し、愚行を煽り、軽率さに拍車をかけることにな

3) ドライデン『オイディプス』1.1.

るだけだからです。

こういった女性の無分別は、結婚後もまた結婚前と同様に致命的なものとなります。誠実で分別のある夫を律義で御しやすい家庭的な人としか考えなくなり、夫よりもはるかに人当たりがよく、笑い、歌い、着飾る爽やかで快活な紳士に想いを寄せることになるからです。

このようなだらしのない快活さは、恋人を選んだり、夫への対応をするときに、女性の心を惑わしますが、子供にも同じように悪影響を与えることになります。子供はあらゆる点で母親の目に魅惑的になるように教育されます。母親は息子に色男と同じものを期待し、無益な子供の姿を借りて自分自身を不滅のものにしようと精力を傾注することになります。

この種の女性の格好の例としては、若きファウスティーナ⁴⁾がそうでした。彼女はローマ五賢帝の一人マルクス・アウレリウスと結婚していましたが、夫よりも平凡な剣闘士の方がはるかに粹な紳士だと考えました。そこで、彼女は息子のコンモドゥスに対しては、自分の理想とする男性像に合せて教育をしたために、コンモドゥスが父親の跡を継いで皇帝になったとき、彼はローマ帝国始まって以来の愚かで放埒な暴君となったのでした。彼の目立ったところとなると、剣闘士や野獣との闘いと人を殺すことしかありませんでした。彼は真の栄光というものには無縁でしたので、現存しています彼の刻印の入ったメダルや彫像を見てもみると、ヘラクレスのように棍棒を手にし、ライオンの皮をまとっているのが分かります。

私が本日の思索をするきっかけになりましたのは、サー・ロジャーの屋敷からそれほど離れていない所に住んでいるある紳士とその夫人にまつわる話

4) ファウスティーナはローマ皇帝マルクス・アウレリウス（在位161-180）の悪妻として知られている。ダネによると、二人の間に生まれた息子コンモドゥスは非常に残虐なうえに放蕩者でもあったので、人々は彼はアウレリウスの嫡子ではなく、剣闘士との間に出来た子供だと考えたということである。また、コンモドゥスは過度の虚飾に走り、若きジュピターともローマのヘラクレスとも呼ばれ、ライオンの皮をまとい、ヘラクレスのように大きくて重い棍棒を手にしていたということである。

なのです。夫人はかつての男たらしで、常に町で気晴らしをしたいと願っています。一方、夫は気難しく質朴な人物で、それを聞くと眉をひそめ苛立ちます。夫人は気取りが度を過ぎ、夫は徐々に残忍さが増してきています。夫人は雲雀や夜鳴き鶯のさえずに我慢出来ず、退屈な夏の日々を嫌い、樹木の木陰や小川のせせらぎにうんざりしています。一方、夫は馬鹿げた芝居やオペラのどこが良いのかいぶかり、朝から晩まで根っからの伊達男や派手な廷臣たちのことを毒づいています。子供たちはこのように考えの違った両親に育てられます。息子たちは父親の考えに従い、一方、娘たちは母親の考えに従い恋文やロマンス物を読みます。この結果、女の子たちは父親を田舎者と考え、男の子たちは母親をふしだらな女と考えるようになります。

アリストゥスとアスパシアの生活はこれとは正反対です。一方の清純な快活さは、他方の心地よい沈着さによってうまく調和が保たれています。妻は夫の話を聞いて聡明になり、夫は妻と一緒にいることで気持ちが和らぎます。アリストゥスはアスパシアの存在がなかったら、これほど愛想のよい人物にはならなかったでしょうし、アスパシアにしても、アリストゥスがいなければこれほど敬愛される人物にはならなかったでしょう。二人の美德は子供たちに溶け込み、家族中に絶えず慈しみと満足感と充実感がみなぎります。

第129号 1711年7月28日（土曜日）

【アディソン】

最後尾の戦車のように、呪われる者は

近づけど決して先頭に出ることはない。(ペルシウス)¹⁾

絵画の巨匠は当世風の人物を描こうとはしません。なぜなら、彼らは現在流行している頭飾りとか髪は、肖像画に雅やかさを与えるものの、人物をとっても奇異なものにしてしまい、おそらくは、後世の人たちにとっては奇怪な

1) ペルシウス『諷刺』5.71-72.

人物としか映らないことがよく分かっているからなのです。このため、彼らが著名人を描く場合は、しばしばローマの衣裳か何か別の不変的な衣裳をまといわせます。私は、地方の友人のために、彼らが利用できる永久不変な着衣があればよいのと思っています。と同時に、彼らがそれを気持ちよく受け入れて欲しいものと思います。こういったいわば定番の衣服がありませんので、地方に旅する人は、まるで旧家の先祖の肖像画が飾られている部屋を散策しているように、出会う人の衣裳が実に多種多様であることに驚きます。衣服をあれこれ取り替えないで、ひとつの衣服を着続けていれば、現在はどうでなくても、いつかは流行するものなのです。静止している時計が正確に時を知らせるように、流行を追いかけていけば、いずれはそれが見直されることになるのです。従ってここでは、ある紳士が歩き回っている仲間の後を追いかけて町中を探し回っている友人に忠告したように、私もまた、後を追っていると見つからない、そうではなくて、動かずに町角でじっとしているとそのうちに必ず出会えるのだと忠告したいと思います。

このテーマについてはすでに触れたことがあります。²⁾そこでは地方の人たちが町の人たちの影響を受けてしまい、自分たちでは流行の最先端を行っているものと思っていますが、とても滑稽な格好をしていることに触れました。(そこでもほのめかしておきましたが) その後、現在西地区の巡回に出ています紳士からつぎのような手紙を受け取りました。

拝啓

コーンウォール生まれのミドルテンブル法学院の弁護士である私は、例によって、健康のことを考えて西地区の巡回に出ています。³⁾巡回中は顧客にわずらわされることがありませんので、暇を見つけては、同伴者の目をかすめていろいろなことを観察しています。

2) 第119号参照。

3) 弁護士が巡回裁判に出る場合は、一般に、自分の出身地を担当することが多かった。

巡回中に出くわした最もお洒落な女性の一人にステインズの宿屋の女主人がいます。その宿に立ち寄った日はたまたま祭日に当たりました。彼女のコモード（髪飾り）の高さは15センチほどで、ペティコートの円周は数ヤードでおさまっていました。⁴⁾同じステインズで、ラミイ風の帽子でもかぶっていなければ、目も当てられないような髪を着けた若者を見かけました。⁵⁾旅を続けていくに連れて、ペティコートがだんだん小さくなっていくのに気が付きしました。そして、ロンドンから60マイルほど離れた所では、ペティコートは歩き回るのに少しも不便さを感じないほどのものになっているのです。

ソールズベリー近郊では、服装は少なくとも10年遅れています、とても素敵で格好をした治安判事の夫人が目にとまりました。彼女は頭の先から爪の先までひだ飾りがついていました。リボンにも一本残らずひだがついており、衣服の至る所にカールが施されていました。そこで、彼女はまるでいわゆるフリースランドの雌鳥のように見えました。⁶⁾

治安判事夫人を見かけた所からもう少し行った所では、どういう訳か、昨年流行した小さなマフが復活しており、お洒落な婦人たちはみんな流行の型に合わせるために、昔のマフを二つに切って短くしているとの情報を耳にしました。⁷⁾この小型のマフは議員が無料送付で小包にして送ったとの噂は信じることは出来ませんが、おそらく今年の冬には、ロンドンではすっかりすたれていることでしょうが、地方では大流行することでしょう。

昨年の州四季裁判所で見かけた伊達男の筆頭は、ウィリアム王時代のとても奇怪な亜麻色の髪をかぶっていました。どうもこの人物は家では髪はかぶらないようです。そこで、半年間は丸々、その髪を判事と会う場合にはいつ

4) 髪飾りコモードについては第98号、ペティコートについては第127号参照。

5) ラミイはスペイン継承戦争で、1706年5月、モールバラ公がフランス軍を破った現在のベルギー中部の地。18世紀に流行した後ろに垂らした尾の上下2箇所をリボンで結んだ髪の名となった。

6) フリースランドはオランダの一地方。

7) マフは毛皮などでこしらえた婦人用の筒状になったアクセサリーで、防寒のために両端から手を入れて使用した。

でも着用できるように袋に入れて保管しているようです。

ここではコーンウォールの辺境の地にある教会で遭遇した珍しい体験を無視する訳にはいきません。みんながお祈りをしているときに、冬場は夫とロンドンにいたこの地の領主夫人が、小さな頭飾りをかぶり、フープペティコートを着用して会衆の中に入って来ました。人々は全員、その姿を見て啞然として立ち上がりました。巨大なお尻をじっと見つめている人がいるかと思えば、不思議な頭飾りに目を奪われている人もいました。そうこうしている間に、この領主夫人は辺りを席卷し、人々のささやきや憶測や驚きが飛び交っている中を、大層満足そうに自分の席まで進んで行ったのでした。

つぎの場所に移動中に、絹の黒い後髪入れの付いた短い弁髪風の髪をかぶり、全速力で馬を駆けている若者を見かけました。⁸⁾彼は突然私が乗っている馬車のところで馬を止め、判事さんはどのあたりにいらっしゃいますかと尋ねて来ました。彼は瞬間に走り去りましたので、彼が着用していた新調の絹のチョッキしか目に止まりませんでした。そのチョッキは数カ所ボタンがかかかってなく、その中に着ている腰までひだのついた真新しいシャツが見えたのです。

王国のこの辺りから西側では、チャールズ2世の時代に舞い戻ったようでした。人々の衣裳はその当時とほとんど変わりがないのです。最もお洒落な郷土は、今でも帽子のかぶりかたはモンマス風⁹⁾で、彼らが女性を口説きに行くときは(軍籍があるなしにかかわらず)総じて赤いコートを着用します。昨夜泊まったところで、ある紳士の格好を見て本当に驚きました。彼はナイトキャップ型の髪¹⁰⁾をかぶり、コートは長めのポケットがついて袖には切れ込みが入っていました。そして、靴の上部には貝殻が付いていました。彼と

8) ボブは、長髪の髪とは違って髪のを結わえた短髪の髪のこと。

9) 王政復古期に流行した帽子のかぶりかた。チャールズ2世の庶子モンマス公(1649-85)の名前がついた。モンマス公は、1685年、ジェイムズ2世が即位したとき王位を求めて反乱を起こし捕えられ処刑された。

10) 形がナイトキャップに似たぴったりした髪のこと。

話をしてみて、彼が地方の人々があかぬけていないことを笑っており、お洒落に生き甲斐を見出している人物であることが分かりました。

ところで、もし貴殿が私のこういった旅行中の話が人のためになるとお考えでしたら、来年は他の地方の出来事をお伝えしたいと考えています。北地区の巡回には西地区よりも好奇心を引くものが沢山ありそうです。コーンウォールよりもカンバーランドの方が流行に疎いようです。特に、ニューカッスルにスティーンカーク¹¹⁾が登場したのはほんの2ヶ月前ということですし、一見に値するコモード（婦人の髪飾り）もまだいくつか残っているようですから。

第130号 1711年7月30日（月曜日）

【アディソン】

つぎつぎに戦利品を手にし、それで暮らしを立てていくのが、
相も変わらぬ彼らの喜びとなっている。（ウェルギリウス）¹⁾

昨日、友人のサー・ロジャーと野原を馬でかけていたとき、ジプシーの一団に出会いました。²⁾ 友人は彼らを見かけたとき、この無法の無宿人たちに治安判事としての責務を発揮すべきかどうか少し戸惑っていました。だが、こういった場合に相談に乗ってくれる教会の書記が居合わせていませんでしたし、そんなことをすれば家禽がひどい目に会うかも知れないと考えて、そうしないことにしました。そして私に、物を盗んだり召使たちを墮落させるといったジプシーの危害について語りました。サー・ロジャーによるとこうで

11) スティーンカークは、1692年8月3日、フランス軍がイギリス軍を破った現在のベルギーの地で、男女が用いた先がレースのゆるく垂らした首巻の名称となった。1692年冬にパリで流行し、その後イギリスにも伝わった。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』7.748-9.

2) ミッソンによれば、イギリスでは16世紀に定められた法律によって、ジプシーは重罪人として縛り首になるはずであったが、執行されていなかったということである。

す。垣根にたまたまりンネルを乾していると、必ず無くなってしまふ。³⁾牧草地で豚が迷子になると、九分九厘彼らの餌食にされる。彼らは大体一年のこの時期になると、この辺りに一人二人と集まって来る。そして、早く結婚したいと思っている下女たちの心を惑わせ、彼らが滞在中は、彼女たちの本来の仕事が手につかなくなる。毎年夏になると、きまって硬貨一枚で彼らに手相を見てもらっている根の正直な乳絞りの娘がいるが、いつも教区で一番の素敵な若者が現れると告げられている。あの執事も愚かにも彼らにたぶらかされているのです。彼は運勢を占ってもらうたびに、ナイフかフォークかスプーンが1本無くなるのだが、必ず一年に一度30分以上は、老いたジブシーと食料貯蔵室に閉じこもる。ジブシーが格好の餌食にするのは恋人たちなのです。時折綺麗な女がいる。このふしだらな女はきまって歯は白く、瞳は黒いのだ。

私にとっては全くあずかり知らないこの連中の話に私が非常に熱心に聞き入っているのに気づいて、サー・ロジャーは君さえよければ私たちの運勢を占ってもらおうかと言いました。私が彼の申し出をととても喜んで受け入れましたので、二人でジブシーたちの所に行って手を差出しました。一団の中のカサンドラという女が、私の手のひらの筋を熱心に見てから、私には密かに恋している綺麗な娘さんがいると告げました。私は私が語るには相応しくないと考えるある事情を抱えた立派な婦人の恋人だということでした。友人のサー・ロジャーも馬から降りて近くにいる二、三人に手のひらを差出しました。彼らはよってたかって彼の手をいろいろいじくりまわして、筋を入念に調べました。そして、一番年を取っており肌の色も最も日焼けしたジブシーが、彼には寡婦がいると告げました。サー・ロジャーはそれを聞くと、とんでもない女だ、立ち去ってしまえ、と大きな声を出しましたが、私の顔を見て微笑んでいました。彼が胸中ではまんざらでもないと思っていることに気

3) 「翌朝になると、めんどり3羽とおんどり1羽が消えており、／垣根からは、女物のかぶりもの2つと上っ張り1枚がなくなっていた」ジョン・ゲイ(1685-1732)『羊飼いの1週間』(1714)「火曜日」79-80行。

づいたそのジプシーは、彼の手をもっと詳しく調べて、彼は真実の恋を貫いており、今夜彼女の夢には彼が登場すると告げました。友人はフンといい、先を続けるようにと命じました。すると、ジプシーは彼は独身だが、その期間もそれほど長くないだろう、また、彼は誰に対してもご自分が考えている以上に優しい方だと告げました。サー・ロジャーはまた、とんでもない女だと言いながらも先をと命じました。すると、ジプシーは、旦那様、あなたは茶目っ気たっぷりに本心をお見せにならないので、素敵なご婦人は頭を痛めるのです。あなたはいわれなく作り笑いは浮かべられるお方ではありません。以上のようなことは、予言の曖昧な点であるかのように、不器用な語り口で告げられましので、私たちはそれだけに一層を身を入れて耳を傾けたのでした。という次第で、サー・ロジャーは、手相を見てもらった女に金を渡し、再び馬に跨ったという訳です。

馬に乗ってジプシーたちのもとを離れると、サー・ロジャーは私に向かって、自分の知っている思慮分別のある何名かの人はジプシーの予言を真に受けるのだと言いました。ゆうに半時、彼はいつになく楽しそうでした。彼が気分をよくしているところで、魔術師でもなんでもない普通の乞食に出くわしました。彼は乞食に施しを与えてやろうとしましたが、財布が無くなっているのに気づきました。要するに、この種の社会の害虫は実に手先が器用な訳です。

ここでは読者の皆さんに、ヨーロッパ諸国に横行し、それぞれの国にあって、勝手に一種の共和国を築いて暮らしている怠惰で品行のよろしくないこういった連中に関する歴史的な歩みをお伝えすべきかも知れませんが、本日は二十年ほど前の月刊誌に掲載されましたオランダでの生々しい出来事をお知らせすることにします。「ライデンからアムステルダムに向かう貸し船が棧橋を離れようとしたとき、少年が一人運河沿いに走って来て、乗せて欲しいと頼みました。ところが、少年が船賃をもっていなかったために、船長はその頼みを拒絶しました。少年の容貌が気に入る、密かに同情を寄せていたある豊かな商人が船賃を出して、乗せてやって欲しいと言いました。船に乗せ

て、少年と喋ってみると、彼が難なく三、四ヶ国語喋れるのが分りました。そして、さらに話し込んでみると、彼は子供の頃にジプシーにさらわれ、それ以来ジプシーの団に組み入れられ、ヨーロッパの各地を放浪していたのだということが判明しました。本能的といえるのだが、密かに少年のことを気にかけている商人は、たまたま数年前に我が子を亡くしていました。商人夫妻は長い間子供を捜しまわっていましたが、国に多くある運河にでも沈んだのだと諦めたのです。可愛い一人息子がなくなったことに打ちひしがれた母親も、その悲しみが原因で亡くなってしまいました。子供が行方知れずになったときに、妻がいつも口にしていたホクロだとかその他の特徴などを思い浮かべながらこの少年を観察してみると、奇妙なことに彼を一目見て心が動いたこの少年が、自分の息子であることが判明しました。少年は、大層な金持ちでおそらく豊かな財産を残してくれると思われる父親の出現を心から喜びました。一方、父親もまた、諦めていた息子が大きく成長し、鋭敏な理解力を備えたうえ、諸外国語にも堪能になって帰還したことを大いに喜びました。」以上で記事は終わっていますが、その後の噂を信じる事が出来ると思いますと、優れた教育を受けるための並外れた基礎力のあったこの諸外国語に通じた若者は、その後、さまざまな教育を受けて、遍歴中に身についた悪癖が徐々に消えて行き、紳士になりました。それだけでなく、彼はその後国命を受けて外国の宮廷に遣わされ、彼及び彼を派遣した者にとって大きな評判を得たのです。そしてまた、彼は著名な公使としてかつてジプシーとして放浪したことのある国々を訪問したとのことでした。

第131号 1711年7月31日(火曜日)

【アディソン】

今一度、堂々たる森に別れを。(ウェルギリウス)¹⁾

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』10.63.

狩りの好きな人は一般に自分の領地の獲物は保護し、隣人の領地の獲物を相手にするものです。²⁾友人のサー・ロジャーもたいていの場合、自分の領地内の獲物はそのまま最悪の状態のときのために確保しておくために、屋敷から二、三マイル先の領地の境界まで出掛けて行って野ウサギやヤマウズラを捜し出します。こうすることで、屋敷内の猟鳥類は繁殖が可能になります。また、狩りというものは、獲物が見つけない方が、つまり追跡にまごつくほど沢山いないときの方が面白いものなのです。そこで、地方の紳士は、抜け目なく、自分の領地内の獲物はめったに餌食にはしないのです。

同様の理由から、私は私のような人種にとって最大の猟場である都会をあとにして、地方で運試しをすることにしました。あれから一ヶ月になりますが、地方ではいくつかのテーマに取り組み、人様も楽しんで欲しいのですが、自分ではかなり楽しみながら思索を巡らせてきました。地方では猟鳥を飛び立たせるには多大の努力が強いられます。一方、都会では私がある人物を追跡していると、必ずや他の人に行く手をさえぎられます。男女それぞれ実に多様な奇妙な人物が登場し、お互いの遺臭をかき乱しますので、追跡が困難になるのです。私にとって最大の難関は、地方では獲物を探し出すことであり、都会では獲物をどれにするか選択に迷うことなのです。この間一ヶ月丸々、ロンドンおよびウェストミンスター市を留守にしましたので、そちらに帰りましたら、新しい獲物がふんだんころがっているものと期待しています。

実は、近隣の人たちが一様に私の人となりについて詮索するようになっていしますので、そろそろ地方を離れる潮時だと考えています。私が孤独や寡黙を愛し、独特の暮らし方をしていることが当地の人々の多大の好奇心を喚起しているのです。

私という人物に対する見方はさまざまです。非常に傲慢だとか、非常に謙虚だとか、非常に陰気だとか、見方はまちまちです。友人の執事が言うには、

2) 第122号参照。

私が大半を一人で過ごし、一緒にいるときもほとんど口を開かないを知っているウィル・ウィンプルは、私が人を殺めたことがあると思っているとのことです。地方の人々は私を魔術師ではないかと考えているようです。私がモル・ホワイトを訪ねたということを知った人の中には、サー・ロジャーが魔術師を連れて来たのはきっと老婆を矯正し、魔力を取り除くためなのだと考えている人がいます。私の手には負えないこの老婆は、ここではいわゆる「白い魔女」³⁾と呼ばれているのです。

五マイルほど離れたところに住んでおり、サー・ロジャーとは社交上の付き合いのないある治安判事は、どうやら食卓で何度か、サー・ロジャーは屋敷にイエズス会士を引きずり込んでもらいたくないものだと、そしてまた、紳士諸士は私に自分のことを喋らせるようにした方が賢明だと思うと、語ったとのことです。

おまけに、サー・ロジャーの友人たちの中にも、老勲爵士は腹黒い人物に付け込まれているのだと危惧している人がいます。つまり、サー・ロジャーは町では誰とでも交際しているので、彼が連れて来たのは見捨てられたホイッグ黨員に他ならず、彼が不機嫌で黙っているのはそれが原因だと考えている人がいるのです。

以上のように、私への見方はさまざまです。ある人々には不満居士だと、またある人々にはローマカトリックの司祭だと見なされています。また、魔法使いだとか、殺人者だと見なす人々もいます。単に私が腹を立てたり、相手をへこませたり、騒ぎ立てたりしないという理由で、これだけ色々取り沙汰されている訳です。なるほど友人のサー・ロジャーはみんなに「あれがあの人流儀であり、沈着冷静なだけなのだ」と話すのですが、それだけでは満足しないのです。誰もが私が何か隠しているはずだし、私がいわれなく黙っているはずはないと思っているのです。

3) 「白い魔女」という言葉は、元々占い師のことを指した。「どの村にも物知りとか魔法使いとか白い魔女と呼ばれる人物がおり、求められれば心身の疾病の治療に当たる。」(バートン『憂鬱の解剖』(1621) 2.1.1.)。

とにかく、お祭り騒ぎが嫌いで、いわゆる良き隣人でない私のような気質の人物には地方は場違いであることが身をもって分りましたので、明日ロンドンに向けて出立することにします。予期せぬ客人が闖入すると機嫌が悪くなり、自分の時間として好きなことに打ち込もうとしている午後の時間を来訪者のために犠牲にすることが嫌な人物は、こういった暮らしではどうしても無愛想な人物にならざるを得ません。従って、つぎの言い回しが可能だとすればの話ですが、私は町に引きこもって孤独になるために出来るだけ素早く群集の中に身を置くことにします。町でなら誰にも監視されずに、好きなように思索に耽ることが出来ます。さらに、仲間づきあいの利点を生かしながら孤独という特典も享受できます。ところで、この一ヶ月を終えるにさいし、つまり、田舎での思索を締めくくるにさいしまして、⁴⁾友人のウィル・ハニコームからの手紙をご紹介しますと思います。彼はこの40年間というもの終始ロンドンの煤煙の中で暮らしており、その間ロンドンを留守にしたのは一ヶ月にもなりません。私の田舎での暮らしについて、彼一流のやり方で揶揄しています。

前略

この手紙が着く頃には、貴殿はヒナギクを摘んでいるか、干し草の匂いをかいでいるか、何かその種のことをして過ごしているものと推察します。しかしながら、貴殿はモル・ホワイトやウィル・ウィンブルと交際するだけで、我々のために何一つ貢献しないものだから、我々クラブ会員一同としては、貴殿のすみやかな帰還を求めざるを得ません。雄鳥や雄牛の話とか妖精や魔女の話はもう十分です。貴殿の思索にはこのところべらぼうに森や牧場の匂

4) この号で、いわゆる「田舎での思索」は終わる。7月には合計26号発行したが、そのうちの20号はアディソンが担当した。一方、8月は135号と150号以外はすべてスティールが担当した。アディソンはアンブローズ・フィリップと共に、バースで8月を過ごし、ロンドンには9月初めに帰ってきた（ピーター・スミザーズ『アディソン伝』226～227頁）。

いが漂い始めています。貴殿がすみやかに帰還しないとすると、貴殿がサー・ロジャーのところの乳絞り女にでも恋しているものと考えことにします。勲爵士によろしく。サー・アンドリューが私たちの元を去ってから、彼が当クラブの先導者となっています。彼がすみやかに戻ってこなければ、我々は一人残らず国家の下僕となってしまいうだろう。

貴殿の永久の友、ウィル・ハニコムより

第132号 1711年 8月1日(水曜日)

【スティール】

時間を考慮しなく、相手に口を開かせなく、
自分のことばかり語り、一切相手のことを構わない者は、
無礼者と呼んでも差し支えない。(キケロ)¹⁾

親切な友人サー・ロジャーには翌日ロンドンに向けて出立すると知らせておきましたので、夕方の指定された時刻に馬が用意されました。そこで、翌日の乗合馬車に乗り込むために、召使を一人伴って屋敷を後にしました。そして、日が沈む頃には州庁所在地に到着しました。宿に着くとすぐに、私のお供をしてくれた召使が、私に代わって、顧客係に馬車の同行者はどんな人たちかと尋ねてくれました。顧客係によると、一行は大富豪のベティー・アラブル夫人、寡婦となっているアラブル夫人の母親、(彼女たちが出掛けるといことで席を確保した)徴兵官、(母親が娘を結婚させたがっている)アラブル夫人の従兄弟の若い郷士クウィックセット、夫人の後見人であるクエーカー会員のエフレイム、そして最後に、サー・ロジャー・ド・カヴァリの客人の寡黙な紳士の以上6名ということでした。顧客係の私に関する言い方を聞いていて、彼が役目に忠実な人物であることが分かりました。そして、私に関する気まぐれな説明もさることながら、他の者たちの説明にも何らかの

1) キケロ『弁論術』2.4.17.

根拠があると思いました。翌日は夜明けとともに点呼がかかりました。生来内気だと自認している私は、できるだけ争いは避けたいものですから、みんなを待たせないように素早く身繕いしました。出発の準備として、まず最初に、大尉の半矛を御者席の傍に収め、太鼓を馬車の後部に載せました。その間、大尉の随員の鼓手は口うるさく大尉の所持品を大切に扱うようにと大声を出していました。²⁾大尉のマント入れは御者席に載せることになりました。軍人特有の不愉快な振る舞いですが、大尉自身は部下に向かって、自分が占める御者席側の席にはどなたかご婦人をお載せするようにと命じました。

間もなく席が決まり、温厚な人ででもなければ、一目見て互いに反感を抱くような感じで席に着きました。馬車の中は無神経にごたませにされ、ある種のなれなれしい雰囲気生まれていました。二マイルほど進んだところで、寡婦が大尉に、新兵の補充は如何でしたかと尋ねました。徴兵官は、自分では精一杯上品ぶりながら率直に、「実はあまりついていないのです。職場放棄する者がいてまいてるのですよ。戦争はやめにして、あなたかあなたの美しいお嬢さんのお役に立てられれば嬉しいのですがね。要は、私は軍人で、性格はあっさりしているのです。奥さん、あなたは私が若くて身体健全で厚かましい人間だと思いでしょ。奥さんかお嬢さんの相手として私を選んで下さい。私はあなた方の意のままになりますよ。うん、私は好運な軍人なのです。」と言うのでした。こう言うと、徴兵官は一人で勝手に笑い、他の者は黙り込みました。私は大急ぎで眠り込むしかありませんでした。「さあ、決心して下さい。つぎの町で結婚式を挙げましょう。眠っているこの愛すべき人物に新郎の付添い役になって戴きましょう。」と彼は言いました。そして、最後に、(クエーカー会員の膝をポンとたたきながら)「奥さん、如才ないこの方はきっと父親としての務めが分かっていると思いますよ。」と言いました。するとこのクエーカー会員は、たまたま頭の切れる人物でしたが、「ねえ、あなたが美しく貞淑なこの子の父親の権威を私に授けて下

2) 大尉の随員として、当番兵が一人ついている。

さったことは善意と受け取ります。でも、断言しておかなくてはなりません。彼女を嫁がせるとしましても、あなたは駄目です。あなたの陽気さには愚かさが漂っています。あなたは軽いお方だ。太鼓がいい例ですよ。太鼓は中が空洞だから鳴るのです。まさしく、あなたがお喋りなのは、あなたの中味が空っぽだからであって、中味がたっぷり詰まっているからではないのです。いいですか、私たちはみんなこの馬車でロンドンに向かっているのです。他に方法はないのですよ。この善良な母親は、あなたが愚かなことを口にしたとしても耳を傾けざるを得ないのです。いいですか、私たちには防ぎようがないのです。あなたが喋れば、私たちの耳に入るのです。だが、もしあなたが賢明なお方なら、勇敢な態度に便乗して私たち平穏な子供たちを当惑させたりはしないでしょ。あなたはご自分で軍人だとおっしゃる。何卒、あなたに逆らえない私たちを助けて下さい。眠っている振りをなさっている私たちの友をあざけてはなりません。あの方は何もおっしゃりませんが、辛抱なさっているのですよ。貞淑なこの娘さんの聞いているところで、あなたがはしたないことを喋りますと、それはいわれないことで苦しみられている人物にとって大きな侮辱となります。公共の乗物であるこの馬車に閉じ込められていることによって、聞きたくもないことを無思慮に無理やり聞かされることは、公道で暴行されるようなものなのです。」と応じました。

ここでエフレイムは話を止めました。すると、気楽でまれにみる厚かましいところのある大尉が(その厚かましさを自覚しているのですが)「あなたに感謝します。あなたに譴責して戴けなかったら、もっと図々しいことを口にしていたかも知れません。確かにあなたのおっしゃる通りです。これから先はおとなしくします。気取っていたのです。ご婦人方失礼しました。」と言いました。

大尉も機嫌を損ねず、みんなもこのちょっとした騒動によって不愉快にはなりませんのでしたので、エフレイムも大尉もその後は気持ちよく楽しく過ごしました。そして、二人は一同の旅程に関してそれぞれの職分を発揮しました。勘定の清算や部屋割りなどはエフレイムの担当となりました。そして地

方からロンドンに向かう乗物は沢山あり、いろいろな争いが生じましたが、私たちの馬車の御者には落ち度がなく、私たちに分がありました。そんな道中での争いごとを処理するのは大尉の分担となりました。私たちが経験した出来事はいくらもものばかりで、お伝えして面白そうなことはありませんでした。だが、同行者のことを考えた場合、全行程において、楽しんだ人も苦しんだ人もいますが、無礼な言動がなかったのは大きな好運でした。そのため、もうすぐロンドンというところまで着いたときにエフレイムが語った内容には、優れた悟性だけでなく、育ちの良さをも感じさせるところがありました。若いご婦人がとても楽しい満足した旅だったと気持ちを伝えると、エフレイムはつぎのように言ったのです。「人の心つまり内面の素晴らしさというのは、見知らぬ人、とりわけ、仲間として交わるにはどうしようもなく不適當だと思える人に出くわしたときに、どういった振る舞いをするかで分かるものなのです。立派な心の持ち主は、愚直で単純な人々に出くわした場合、邪魔だと分かっている、自分を誇示しません。そういった場合にはむしろ彼らを困らせないために、自分の優れている点を隠すものなのです。」そして、彼は徴兵官に向かってつぎのように続けました。「あなたと私はやがて別れます。ひょっとする二度と出会うことはないかも知れません。率直に言ってしまうと、真の人間性にとっては、流行というか服装は取るに足らないことなのです。だから、あなたがそのような身なりをしているからといってあなたを恐いとは思ってはなりませんし、私がこんな身なりをしているからといって馬鹿にしてはならないのです。あなたと私のような人物が出会い、互いに親愛の情を持って接すれば、あなたは私の穏やかな物腰を、私はあなたの強さを、それぞれ享有できるのです。」

第133号 1711年8月2日（木曜日）

【スティール】

一体、誰がこれほど心を痛めるのか。

親愛なる友への哀悼の気持ちはいつまでも果てることはない。

(ホラティウス)¹⁾

死を直視するときには、恐怖と悲しみが交互に訪れる喜びに似た感情が生まれるものです。最後まで平静に、忍従して、快活に、寛大に、あるいは英雄的に身を処した人々に思いを馳せるとき、好奇心はいつになく覚醒されます。こういったそれぞれの振る舞いに対して、私たちは心密かに自分たちでも模倣できる、あるいは自分たちには特別にそれが可能だと想像するときに感動します。君主のような高貴な人々は、凡人にとってはお手本というよりも崇拜的のです。しかしながら、偉人の死ほど私たちの想像力を掻き立てるものはほかには見当たりません。社会にとって益をもたらしたものの罪人の責めを受けた無実の人々は、数ある人々の中でも、死者としては最も際立った存在であると思われます。ソクラテスが邪な時代のせいで死刑を執行されるとき様子は、実に荘厳かつ見事なものです。彼を支えるものは自らの良心のあかしと将来の憶測しかないのですが、陽気に上機嫌で毒を手にし、楽しい旅路につくかのようにして死を迎えたのです。まるで将来神のように崇拜されることを見越したような最後だったのです。²⁾

ソクラテス同様、フォキオンもまた立派な功績を残したにもかかわらず、国からはひどい仕打ちを受け、多くの友人たちとともに死を迎えることになりました。多くは自分たちの運命を嘆いていましたが、彼は落ち着いて刑場へと足を運びました。傑出した彼の人物は、最後の瞬間に至るまで実に奥ゆかしく発揮されているのです。野次馬の一人につばを吐き掛けられたとき、彼はいつものように威厳を持って、この人物に行儀作法を教えてあげられる人は誰かいらないのか、と言ったのです。罪を犯したために、彼と一緒に処刑されることになった臆病者が、女々しくしていると、お前のような人物にとっては、フォキオンと死を共にすることは慰めにはならないのか、と叱責しました。今まさに死を迎えようとしたそのとき、みんなはご子息にどう伝えれ

1) ホラティウス『頌詩』1.24.1-2.

2) プラトン『パイドン』117C.

ばよいかと尋ねました。すると彼は、アテナイ人のこの侮辱を忘れることだと答えました。同じく処刑される友人のニオクレスは、フォキオンよりも先に毒をあおりたいと望みました。すると、フォキオンはこれまで彼の言うことは何一つ拒んだことがないので、これまでで一番厄介な要求だけれど、承諾すると言いました。³⁾

こういった具体例は実に気高く堂々としたものです。彼らの崇高な精神に思いを馳せると、死はまさに神が意図したものになっていることが分かります。つまり、死はそれまでの悲しみと窮境の救済になっているのです。

テーベの將軍エパミノンドスは、戦いにおいて剣で刺されて致命傷を負いましたが、自軍が勝利したとの報せを受けるまで、剣は身体に突き刺さったままの状態でした。彼は勝利の報せを聞いてやっと剣を抜かせたのですが、そのとき、「諸君、これで私の命が果てるのではない。今からエパミノンドスは生まれ変わるのだ。彼は栄光に包まれて死を迎えるのだ。」と語ったのです。⁴⁾

人生の終焉が単なる平凡な出来事ででもあるかのように、従容として死を迎えた気高く英雄的な人々にまつわる話は、いかなる時代にも無数に存在していました。

実際に体験した生々しい悲しみを払拭するために、憂鬱な気分かられて書物に目を転じているとき、私はいつも以上のようなことに思いを馳せるのでした。だが、想像力を慰めてくれるに過ぎない救済策を施すだけでは、心の琴線に触れる深い悲しみを一掃することは容易ではありません。そこで、本紙は人間生活に関わることを全般を取り上げることになっていますので、悲

3) この箇所の逸話は、プルタルコスの『フォキオン伝』758D、『倫理論集』198 AB から引かれている。フォキオン (c.402-318B.C.) はアテナイの將軍で、アレキサンダー大王の死後 (323B.C.), マケドニアの勢力下で一時的にアテナイの実質的独裁者となった人物。

4) コルネリウス・ネボス (c.100-c.25B.C.) 『著名人伝記集』15.9.ネボスはローマの歴史家・伝記作家で、この書はプルタルコスの『対比列伝』の先駆をなしたとされる。

しい出来事です、つい今しがた目撃したことに触れない訳にはいきません。

私は今日の午後、ある友人⁵⁾が私たち親しい友人や知人に知らせずにこっそり結婚を考えているとの噂を耳にしましたので、彼をからかってやろうと思ってその友人の家を訪れたのです。彼とは長年の付き合いなので、勝手に寝室まで入って行きました。すると、なんと彼は死の苦しみに襲われていたのです。私にどうすることが出来ただろうか。まるで極悪非道の悪人のように、私の胸中にあどけない笑いがこみあげてきたのです。呼びかけてみましたが無駄でした。人事不省に陥り、極度に衰弱していたので、私の悲しみも自身の痛みさえも感じていなかったのです。以下には私の独白を書き写させて戴きます。私の傍には、彼の母が無言で突っ立っていました。彼女は誉れであり慰めでもあり、生まれてこのかた一瞬たりとも悲しい思いをさせられたことのなかった息子を失うことで、深い悲しみに打ちひしがれていたのです。

「あれほど精力的でたくましかった人物が、数時間で死を迎える姿に変わり果てるとはどういうことなのか。今は力なく土色になっているこの唇はほんの二、三日前までは私たちに楽しい話を聞かせてくれていたのに。彼は非常に信心深い人物だった。彼のお陰で周囲の人々は満ち足りた気持ちにさせられたし、彼から多くのことを教わった。彼の言動の原動力は優しさだった。彼は穏健、気立ての良さ、愛想良さ、控え目な態度、清らかさといった法曹界で異彩を放つために必要な能力をすべて備えていたのだ。それなのに今はここでなすすべのない臨終の苦しみに包まれて横たわっている。今まさに死を迎えようとしている彼を前にして、誰にも、そう、私にもなすすべはないのだ。君という余人をもって替えがたい人物を失わんとしていることに対して、私は我を忘れて慟哭するしかない。神が彼を迎え入れ、蘇らせてくださ

5) この友人はオックスフォード大学モードリン・コレッジ、イナートンプル法学院のスティーヴン・クレイのこと。バルバドス訴訟では、1708年から1709年にかけて、スティーヴルの法律顧問を務めた。クレイはまた『フランス王へのバイエルン選帝侯の書簡：ラミイ戦争後』(1706年)の著者でもあった。

るのだ。君の最愛の母も、君に世話になった友も、また君を失うことで困惑の表情を浮かべている召使たちも、ただただ君を見守りながら呆然と立ち尽くすしかない。君に意識が戻れば、君は私たち一人一人に何と言うのだろうか。だが今、あの善良な心もはちきれ、彼は眠っている。息を引き取り、靈魂は天国に召され、もはや熱情に駆られることもない。正義、真実、名誉を求めていた君の計画はどこに行ったのだ。君が編んだ書物、君が口にした主張、君が示したお手本は何の役に立つというのか。学問に励み、慎み深く、立派な人生を歩んできた人たちの報いがただこれだけのものだとすると、何とそれはお粗末なことだろう。いやそうではない、君の弁論、君の友人たちとの付き合い、君の国への貢献は、過去、現在、未来を一望のもとにする神の面前ですでに十分発揮されたのだ。君ほどの才能に恵まれたなら、誰もが野望に苦しめられ、空虚な栄光を求め、他者を妬み、他者と張り合うものだが、君は一心に自己の向上を目指し、高潔、清廉さを追求した。君は静かに生に終止符を打つのだ。君はそっと旅路につくのだ。君の死は何と神々しいことか。もっと名高く、もっと抜け目のない例には事欠かないが、これほど汚れないものは未だかつて私は知らない。」

第134号 1711年8月3日（金曜日）

【スティール】

地上のどこにおいても、私は救い主と呼ばれている。

（オウィディウス）¹⁾

私が田舎に出掛けて町を留守にしています間に、私宛ての郵便物が溜まっていました。私がすぐにも町に引き返して来ると考えられていましたので、郵便物が転送されなかった訳です。タワーヒルから出されたつぎの手紙の主は、時々その地で商品を販売している偽薬売りの情報を伝えて、博識の紳士

1) オウィディウス『変身物語』1.521-2.

たちを楽しませてくれています。愉快なことに、私宛てに手紙をくれたのです。この方は、薬のこともさることながら、道德に関しても見識があるようです。私の施す療法を有名にしてやろうと考えて下さっているこの方のお気持ちに添うために、私はここで、私の手腕に対するこの方の証言をあますところなくお伝えしたいと思います。

拝啓

心の狭さには、どこか不思議な点があり、相手を満足させ、寛大さを欠いてしまうところがある、との先日の記事を拝見しまして、²⁾小生にはその能力はないのではと心を痛めております。かりに小生にその能力が備わっているとしますと、小生がどれほど貴殿の思索を是としているかが貴殿にはすぐに察知できるはずですから。ところで、小生はこの件につきましては、誠意というささやかな捧げ物で埋め合わせをしたいと考えます。貴殿が日々提供して下さる精神の回復剤を、小生は心から楽しみにし、かつ、感謝している次第なのです。小生はいつも朝の一服をやりながら（もっともタバコに火をつける前に、必ず題辞つまりモットーに目を通すのですが）貴紙を熟読しています。そして実際、煙を吐き出すたびに心地よい気分になっています。どの段落にも有益ないし素晴らしい考えが盛り込まれていますので、小生は絶えず大きな満足感を覚える同時に、自身が向上したのではないかと感じている次第なのです。貴殿の扱うテーマの幅広さには驚いていますが、その驚きは、まさに、以前肖像画の詰まった箱を見せられたときの驚きに相当します。³⁾箱の中には一枚しか入っていなかったのですが、それにアイシングラス⁴⁾をかけることで、実際は同一人物でありながら、謹厳な枢密顧問官や道化師、つけぼくろをつけた婦人や修道女、伊達男や黒人、淑女ぶった女や男たらし、

2) 第107号参照。

3) 第28号参照。

4) アイシングラスは、魚類の浮袋から得るゼラチンで、にかわや印刷用インクに用いた。

地方の郷土や魔術師、といったように実に楽しく様々な姿に変身するのです。これは、小生が外見に心を奪われていたときには、子供じみた楽しみでしたが、貴殿の手にかかると、もっと深遠なものになり、心の琴線に触れてくるのです。私たち読者は、想像力を掻き立てられ、熱情は鎮められ、知らぬ間に、貴殿がいつも述べておられる柔和な気分へと導かれます。この気分になることで、寛大な気持ちとなり、ゆとりを持った人間性が育まれます。貴殿の感化を受けない者はよほどの愚か者であるに違いありません。実際に貴殿が生意気をへこませたとか、虚栄に面目を失わせたかどうかは、小生には分かりかねますが、人は誰でも閉じこもってばかりはおれませんし、わずか1ペニーで悪徳と愚行をただす確実な方法が提示されていますので、その可能性は十分にあるものと考えます。名高い執刀者の恩恵を受ける者が、他人もその恩恵を受けられるように、広告を出すのが通例となっていますので、小生にもその義務があると思われます。長い間癪癪持ちで不機嫌でつむじまがりて疑り深く無愛想だった小生は、6日間続けて毎朝本物のヴァージニア産タバコをほんの2分の1オンスやりながら、貴殿の治療を受けましたら、開放的で世話好きなおまけにお節介で率直かつ社交的な人物に変身したのだと世間に公表します。⁵⁾

敬具

ジョージ・トラスティ

1711年7月5日 タワーヒルにて

その後、几帳面な父親であり謙虚な請願者であるこの方は、扇の使い方では苦勞している人たちには、そのうちこれを伝授する教授連の所在地と教授法に関わる広告が掲載されることになるだろう、と語っていました。

1711年7月5日

5) 第108号参照。

拝啓

貴殿は6月7日付けの紙面にて、扇の使い方を伝授する新手の練兵係軍曹殿からの手紙を掲載なさっておられました。⁶⁾実は、私の元に、町に出て来て間もない娘が一人います。この娘はいつもきちんと扇を手に行っているのですが、未だまともな使い方が分かっていなく、まるで小学生が新品の剣をぎこちなく振り回しているような状態です。ただ、現在習いに行かせているお陰で、若い婦人に必要な技はほぼ習得したようです。そこでお願いなのですが、貴殿からその練兵係軍曹殿に、一ヶ月で何を、三ヶ月で何をどの程度習得すればよいか聞いて戴き、その結果ならびにその方の集合場所の所在地を近々紙面に載せていただきたいのです。また、私には息子も一人います。息子には扇の堂々とした使い方を身につけさせたいものと考えています。練習用の扇はすでに購入済みです。何卒宜しくお計らいのほどをお願い致します。

敬具

ウィリアム・ワイゼイカー

追伸

息子が扇の使い方をマスターしましたらすぐに（息子はかなり利発ですので1年もすればマスターするものと期待していますが）、（息子はまだ20歳にとどきませんけれど）可愛がっている母親さえ承諾すれば、つぎには乗馬⁷⁾を習わせてやりたいと考えています。

観察者殿

何卒紳士ベンジャミン・イージーの願いをお聞き入れいただきたいもの

6) この日付は実際には6月27日(第102号)のことだが、どのテキストも6月7日となっている。

7) 『乗馬の歴史と乗馬術』(リチャード・ベレンジャー、1771)によると、「軍人を職業とする者は、一定の原理原則に従って馬の扱い方を修得することが義務づけられていた。そこから、「馬を乗りこなす」といった表現が生まれた。」ということである。この馬とは戦闘や馬上槍試合で使用されるいわゆる軍馬のこと。

と存じます。実は、先日の日曜日に、ハックニーの教会⁸⁾に出掛けましたのが災いの原因なのです。大層仰天したのですが、教会で貴殿がおっしゃっておられた扇を実に見事に操る例の下士官に出会ったのです。私の見たところでは、この巧みな下士官の手にかかって破滅させられた紳士の数は、私自身も入れて5人と下らないのです。彼女の猛威はそれだけに留まりません。彼女の現れるところはどこも荒廃します。そのため、この辺り一帯は大変危うい状態になっています。そこで、心からのお願いなのですが、この勇猛果敢なアマゾンの兵士に直ちに武器を捨てるように命令を出すか、このように傷つけられた私たち紳士諸士が彼女と対等に張り合えるように、かぎタバコの技術を習得するための大集会を開催せよとの指令を貴殿から発して戴きたいと考える次第です。

敬具

第135号 1711年8月4日（土曜日）

【アディソン】

思考を途切れさせないためには、

簡潔さが必要だ。（ホラティウス）¹⁾

いつも一人でお祈りをするときに、フランス人に生まれたことを感謝しているある著名な人物のことをどこかで読んだ記憶があります。私自身はどうかといいますと、イギリス人に生まれたことをこのうえなく有難く思っています。ほかに理由も色々ありますが、我が国の言語は、言葉を惜しみ、饒舌を嫌っている人物にとって実に相応しいものですので、私はこの国に生まれた自分を大変な果報者と考えている訳です。

私はこの幸運にしばしば想いを巡らせますので、本日は英語に関する私の

8) この教会はハックニーのセント・ジョン教会のことで、昔は、社交の中心地であった

1) ホラティウス『諷刺』1.10.9.

考察をお伝えしたいと思います。好奇心の旺盛な読者のみなさんには、きつとご理解いただけるものと考えています。

外国の人たちの言っていることが事実だとしますと、私たちイギリス人はほかのヨーロッパ諸国の人たちよりも寡黙を楽しむ国民です。²⁾ 近隣諸国に比べて、我が国の会話では、話は持続しなく、話と話の間というか小休止が長くなる傾向があります。一方、著作物に関しては、外国の著作物に比べて、文字がぎっしり詰まっているのが分かります。私たちは、生来の寡黙さを大切にするために、自分たちの考えを口にせざるを得ないときには、出来る限り手短に済ませます。

この気質そのものが英語に反映されます。まず最初に、単音節語が多いことがあげられます。³⁾ このことで、私たちはわずかな音で考えを伝えることが

-
- 2) ミソンは、イギリス人が寡黙で思慮深く物思いに沈みがちになるのは、喫煙の習慣が行き渡っていたことと関係がある、と考えた。「イギリス人は一般的に、外国の地でさかんに見られる取り止めのないくだらない話や能弁を気取ったり、思わせぶりな身振りをすることを嫌う。彼らはひとつのテーマに絞って、しっかり議論し、自分の考えを述べるのが好きだ。彼らは一貫して声を荒げることはなく、相手の気持ちを動かすというよりむしろ相手の理性に訴えようとする。要するに、イギリス人は分別のある人として、飾り立てた華やかな雄弁術よりも説得力に議論のよりどころを求める。」(ミエージュ)。
- 3) スウィフトは、タトラー紙第230号への投書で、「音を和らげる母音を省略することで、強情な子音同士が結びついてしまう。これは2音節のものを1音節にしてしまい、ギリシアやローマの言葉の逆になっている。また、英語にゴシック風の歪みを与え、英語を単音節語を好む粗野な言葉に逆戻りさせ、北欧の言語に伺える無音の子音を結びつけている。最初の音節だけを残して、ほかの部分捨ててしまうのだ。このことは、Phizz(顔physiognomy), Hipps(憂鬱症 hypochondria), Mobb(移り気な mobile), Pozz(明確な positive), Rep(名声 reputation) といった単語を見れば明らかだ。英語はすでに単音節語が勝ち過ぎているが、これは英語の名折れなのです。」と英語が乱れて来ていることを嘆いている。スウィフトはまた、1712年5月12日付けポスト・ボーイ紙の大蔵卿への手紙「英語を矯正し、改良し、正確なものにするための提案」の中でもこのことを繰り返し訴え、アカデミーの設立を提案している。

可能となります。これは実は優美さが失われることにはなりますが、その一方で、我が国の言語の方が、旋律的で調子の高い多音節語を多く持っている言語よりも、考えを迅速に述べるのが可能となり、話し言葉のそもそもの目的に適っているのです。英語の音は、一般にタッチするだけで鳴ったり消えたりする弦楽器のそれに似ており、短く瞬間的なものです。一方、他の言語の音は、吹奏楽器の調べに似ており、甘美で力強く、持続的で様々に変化します。

つぎに気づく点は、単音節語でない場合でも、しばしば、私たちはその語を出来るだけ素早く発音して、単音節にしてしまうということです。つまり、ラテン語から派生した綴りの長い語の場合によくあることですが、手短に済ませるという英語の特質に合わせるために、ラテン語は長い音節があるために重々しく荘重な調子になっているのですが、私たちはその長い音節を縮めてしまうのです。こういった例は、「自由 (Liberty)」,「陰謀 (Conspiracy)」,「劇場 (Theatre)」,「雄弁家 (Orator)」などの単語に伺えます。

多弁を嫌う同様の傾向のために、近年では、過去完了時制の語尾を1音節にすることで、英語は相当改変されています。つまり、drowned, walked, arrived はそれぞれ drown'd, walk'd, arriv'd となり、英語の美観を随分損ね、口当たりの良い単語も1割は子音が重なった単語に代わってしまっています。英語に母音が不足していることが、一般に最も洗練された著述家たちのぼやきの種となっていますので、このことはそれだけ一層目立ちます。とはいえ、著述家たち当の本人が、こういった短縮を実行に移していますので、元々あった母音の私底状態は高まるばかりです。

私は現代の生んだ最も偉大な人物が、語尾が ed で終わる単語を非難しているのを聞いたことがあります。前述の所見以外にも、英語では、最後の音節を s に置換して、語尾が eth の語を短縮してしまうといった変化が生じていると付け加えることが出来ると思います。こういった単語はそれぞれ、私たちの先祖にしてみれば、drowneth, walketh, arriveth と発音していたのです。これは以前に頻出していますが、文字を増加させ、外国人にすぐにそ

れと分かる歯擦音が追加していたのです。一方で、これは寡黙な私たちの気質に適っており、余分な音節を取り除くことになるのです。

また、この s 一文字でひとつの単語の役目をし、先祖の His とか Her の意味にもなります。この場合、最善の審判者である外国人にとっては、これは認め難い刷新と映ることは疑いの余地はありません。実際、私たち自身も執筆や厳肅な祈禱に古風な語尾を維持して、ある程度この動きに賛同していない意を表明しています。

以上英語を台無しにしている例を挙げましたが、ほかにも二語を一語にして、英語の調子を狂わせ、子音で流れを妨げている例があります。may not を mayn't, can not を can't, shall not を shan't, will not を won't などとする例がそれに該当します。

おそらく私たちイギリス人はこういった気質を備えているために、書くときでも喋るときでも、単語によっては、極端に切り詰めてしまって、Mob, rep, pos, incog といったように、最初の 1 音節だけにするのでしょう。こういった語が馴染みの言い回しとなって、英語の中に入り込むのです。そして、そのうちに正当な英語と見なされることになるのだと思います。軽率なことに、我が国の詩人の中に、真剣な詩を作る場合にとても重要な実詞（名詞相当語句）を捨てて、『ヒューディブラス』⁴⁾の滑稽な表現を模倣する人がいます。それどころか、言葉を短縮しようとするこの気質が行き渡り過ぎて、かつて、名高い著述家たちの中で、とりわけ、サー・ロジャー・レストレインジを初めとした何名かは、発音に綴りを合わせようとして、彼らが言うところの不必要なアルファベットを取り除きはじめたことがあります。これが徹底されていたら、語源は分からなくなってしまい、英語そのものがことごとく台無しになっていたことでしょう。⁵⁾

同様に、固有名詞の愛称も、他国では、ニックはイタリア語でニコリーニ、

4) サミュエル・バトラーの諷刺詩『ヒューディブラス』(1663-78) 参照。

5) サー・ロジャー・レストレインジ (1616-80) は、翻訳家・ジャーナリスト・パンフレット作者として活躍し、ホウィッグや非国教徒を攻撃した人物。

ジャックはフランス語でジャノーといったように、新たな音節を付け加えたもっと柔らかい言い方を受け入れています。我が国の場合は、一般に単音節になる傾向があると言えます。

英語には、もう一点、単語の儉約を示す顕著な例があります。つまり、英語では、冠詞や前置詞などの小辞をいくつか削除してしましますが、他の言語では、小辞は文を分かり易くするために不可欠の存在となっているのです。優れた作家たちでさえ、しばしば、who, which, that などの関係詞を省略すべきか否かで戸惑っています。こういった文法と慣用句の論争を解決するためには、いくつかの言語を比較して得られた権威と原則に基づいた定説のようなものを確立する必要があるでしょう。

英語はまさしく謙虚で思慮深く律義で、おそらくは、私たちイギリス人を魅力ある国民にしていると思われるイギリス人の特質と天性を反映しているのだと思います。もっとも、このことによって英語が台無しになっている面があることも否めません。おそらくは、他の言語についても同じことが言え、それぞれの言語の特性というものは、その大部分がそれぞれの言語を口にする人々の特質から導き出されるのでしょう。フランス人の軽妙で話し好きな気性は、彼らの言語に少なからぬ影響を及ぼしているのは確かなところです。その例には事欠かないでしょう。また、音楽と社交上の礼儀作法にうるさいイタリア人の特質は、そのための単語や慣用句を作り出しています。威厳と重々しさを重んじるスペイン人は、スペイン語を非常に荘重な言語にしますし、無愛想で誠実なドイツ人の気性の場合には、より洗練されたドイツ語よりも高地ドイツ語の素朴な表現の方が似合っているのです。